

本稿のもくじ

- ・教職大学院教員からのメッセージ
 嬉 真理子 教授 「分かりやすく伝える」
 坂本 哲彦 教授 「最善解と納得解」
- ・各コースの近況報告（講義場面から）
 教職大学院で一緒に学んでみませんか？
 ルーブリックをご存知ですか？
- ・修了生へのインタビュー
 対談者 山口市立白石小学校教諭 天津 悠介 先生

分かりやすく伝える

以前、先輩校長先生にこんなことを言われました。「支援学校のあいさつって、どんなことを話すの？小学生から高校生までいるのにどこにターゲットを合わせるの？」。なるほど、高校の校長先生は確かに長文の式辞など、文章をしっかりと練っていらっしゃるし、全校朝礼など、何をどう語りかけるかを常に意識しておられるのだと思いました。実は、恥ずかしながらそれまで、相手の年齢をそこまで意識しておらず、私自身が語彙不足ということもあり、大人に話すのだから難しい言葉を使うなど全く考えていませんでした。何となく、子ども向けの絵本に大人が感動するように、平易な言葉でも伝わるものは伝わるのだと思い込んでいました。



うれし まりこ 嬉 真理子 教授

様々な分野で「専門家」と言われる方が自分の専門の話をされる時に、専門用語が飛び交ってよく分からないことがあります。「本当の専門家とは素人に分かるように説明できる人」とテレビか何かで聞いた時に、そうあってほしいと思いました。分からないまま話を聞いていてもちっとも興味はわかないし、やってみようと思えない。分からないから聞き直しても、専門用語で応えられては「もういいか」になりかねません。教職大学院で専門的知識をさらに深めていく皆様には、分かりやすく説明のできる、相談されやすい教員になってほしいと思っています。

最善解と納得解

教育学研究科教職実践高度化専攻（教職大学院）は、平成28年度に設置され、昨年度末に5期生が修了している。学校経営コースは、毎年、7、8名の現職の教員、特に中堅教員として勤務している者が学んでいる。大学での理論と原籍校での実践の往還を踏まえ、「学校マネジメント」「教職リーダーシップ」「コミュニティ・スクール形成能力」「学校支援力」を身に付けることとなっている。院生自らの学ぶ意欲と態度の下、積極的な研究と実践を展開する中で、原籍校や地域の教育課題を解決すべく鋭意研究を進めている。



さかもと てつひこ 坂本 哲彦 教授

さて、院生の課題研究においては、大学教員や原籍校の管理職等の指導と院生同士の切磋琢磨の中で、可能な限りより高い取組を進める必要がある。その際、学校の教職員や児童、生徒、また、保護者や地域住民などを巻き込み、最もよいと考えられる内容や方法（最善解、あるいは、最適解）を見つけ、組織的に具体化、実践化することが求められる。試行錯誤もあるだろうが、実践や研究に関わる多くの人に、自らの研究や実践内容、方法の善さや正しさを伝えていくことは欠かせない。その際、取組の善さや正しさだけでなく、自らがそのことに納得し、また、関係者にも同様に納得してもらえるところ（納得解）まで、研究や実践を深め、焦点化することを強く期待している。そのことは、教職大学院10年目に向けて、更なる実績や歴史を積み重ね、山口県教育に貢献する重要なポイントだと考える。

教職大学院で一緒に学んでみませんか？

「90分の講義を受講するために必要な準備時間は、その講義時間の3倍の270分である。」これは、本教職大学院で講義を受ける上で、常に念頭に置いている学びへの構えです。一見、270分という時間を大袈裟に感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、各講義には事前に課題が示され、関係資料や文献等を精読し、自らが問いを立てて講義に臨みます。ここで重要となるのは、「質の高い問いを立てる」という行為です。単に個人の力量によるものではなく、ともに学ぶ院生がどのような問いを立てるかを推察し、講義の中で関連付けたり、対極の見解を述べたりすることを想定しながらある種、視座を高くして考えなければなりません。一朝一夕にはいかないものですが、入学当初からの積み重ねにより、物事の本質により深くアプローチすることが可能となります。そして、講義終了後には、院生控室で論じきれなかったことやさらに深めたい事を自由闊達に意見の交換をする場へと発展します。270分という時間はあくまで目安であり、時としてそれでは足りないこともあります。

現職教員が在籍する学校経営コースにおいては、「学校評価」「学校法令」「リスクマネジメント」「組織開発」「教育行財政」など学校経営に直結する講義が数多くあります。各講義の中心は、上述したような事前課題をもとに、院生と講義担当の教授がディスカッションをしたり、映像を視聴したりするのですが、中には外部講師を招聘し、お話を聴く機会を設定することもあります。

7月19日に学校経営コース2年生の「学校経営と組織開発」の講義の一環として、講師に萩市教育委員会から柳林浩一先生をお招きし、「指導の軸を大切に、9年間で児童生徒を育てる小中一貫教育」というテーマのもと、小中一貫教育がどのような効果を生み出すのかということについてお話いただきました。事前にこの講義の開催要項を県内の小中学校にご案内したところ、24名の申し込みをいただきましたが、大雨のため11名の管理職の方が聴講にお見えになりました。この日の講義の中心は、柳林先生の講話になるのですが、その前段階として院生による事前協議の場も公開しました。院生が「問い」を持ち寄り、「小中一貫教育を始める初期段階で連携することの意義をどのように語り、浸透していくか」など各自が講義で注目するところを共有し、何を学び取るかを議論してから講義に臨みました。さらには柳林先生がお帰りになられたからのリフレクションでは、「理念を繰り返し語っていくこと」や「取組より指導の軸でつながること」、「小中一貫教育はあくまでも学校戦略のツールであり、目的にならないように心がけるべき」などの新たな学びを共有しました。これらの学びは事前協議で獲得したい学びを明確にしていたことによる成果であり、この様子をご覧になられた管理職の先生方から終了後、肯定的な評価をいただくことができました。

県内の先生方に教職大学院の学びを実際にご覧いただくことで、ご自身の学びにつなげていただくと同時に、私たち教職大学院生もより高度な学びを実現させていくことをめざしています。こうした講義のご案内は今後も様々な形で情報発信していきたいと考えております。積極的なご参加をお待ちしております。



写真：院生が「問い」を持ち寄り、各自が講義で注目したところを共有する様子

ルーブリックをご存じですか？

ルーブリックとは、パフォーマンス課題における学習の到達度を評価する際に使用する評価指標のことをいいます。評価とは教員がするものと思われがちですが、児童・生徒が“自身の立ち位置を確認・評価するためのツール”という意味合いでも用いられます。

山口県では、学校・地域連携カリキュラムを活用した小中9年間の学びの継続を進めています。カリキュラムでは9年間の単元が並べられていますが、学びを通してどのように変容したか、児童・生徒、教員がともに把握するために有効な手立てとして、「ルーブリック」が活用されることもあります。

近年の教育では予測困難で不確実、複雑で曖昧な時代を生き抜くために、児童生徒には「メタ認知能力」、「エージェンシー」を育成していくことが重要であるといわれています。「メタ認知能力」とは、自己調整力に欠かせない能力で、「自分の認知活動を客観的にとらえること」をいいます。大谷翔平選手がメタ認知能力を活用している例として、高校生の時に作成した「マンダラート」と呼ばれる目標達成シートは有名な話です。「エージェンシー」とは、これからの社会を生きる子どもたちに育成したい力について、OECD（経済協力開発機構）が発表したもので、「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」をいいます。小中9年間、協働的な学びを行う中で、「メタ認知能力」と「エージェンシー」がどれほど獲得できたか、ルーブリックを活用することで自分の立ち位置を把握することができ、子どもたちに次の目標や学びを考えさせることができます。

教職大学院でも今年度、「自己の成長を把握する」「院生が学校実習の目標を共有する」「ともにめざす目標を思い描く」ことから、学校実習ルーブリックを作成しました。図は、教育実践開発コースのルーブリックです。私たち教職大学院生もルーブリックを活用して、より深い学びとさらなる成長をめざしています。

学校実習ルーブリック【教育実践開発コース】教職総合実践Ⅰ・Ⅱ			
	①授業力向上	②生活指導	③教師の役割
レベル5 (任意設定)			
	私のルーブリック		
レベル4 (2年次後期)	より良い授業を計画し、望ましい実践が行える。	生活指導の場면을継続的に経験し、児童生徒理解に基づいた指導を行う。	学校における教師の役割を深く意識して、メンター指導のもとに適切な業務運営を行う。
	授業のねらいを明確にし、児童生徒の実態に即した指導や授業形態を工夫することができる。	児童生徒理解を図るとともに信頼関係を築きながら他の教職員との連携のもと、柔軟かつ適切に指導や支援ができる。	人権教育やキャリア教育、特別支援教育や学校安全等、指導を仰ぎながら幅広く教育活動を実践する。
レベル3 (2年次前期)	より良い授業を計画し、実践するとともに、これまでの省察を授業づくりにいかすことができる。	生活指導の場면을継続的に経験し、児童生徒理解に努めることができる。	学校における適切な教師の役割を体験し、指導力向上に努めることができる。
	授業のねらいに即した指導方法や授業形態を実践化し、省察と改善を行う。	児童生徒との適切な人間関係の構築に努めるとともに、他の教職員からの助言を得ながら適切な指導・支援を行う。	人権教育やキャリア教育、特別支援教育や学校安全等、指導を仰ぎながら幅広く教育活動に取り組む。
レベル2 (1年次後期)	より良い授業について見識を広め、適切な実践が行えるように努める。	適切な生活指導の場면을体験し、児童生徒理解に努める。	学校における適切な教師の役割を意識し、様々な業務運営に携わる。
	授業分析と考察をもとに、ねらいを明確にした授業実践を行うことができる。	児童生徒との人間関係の構築に努めるとともに、生徒指導の実情に即した指導の在り方を探る。	人権教育やキャリア教育、特別支援教育や学校安全等、指導を仰ぎながら教育活動に関わる。
レベル1 (1年次前期)	より良い授業の条件を整理し、実践に向けた計画を立てることができる。	適切な生活指導の場面から児童生徒理解に努める。	学校における教師の役割を見出し、理解を深める。
	授業参観の視点を明確にし、授業を分析し、考察することができる。	児童生徒との人間関係の構築に努めるとともに、生徒指導の実情を知る。	人権教育やキャリア教育、特別支援教育や学校安全等、教師の様々な取組を知る。

図：教育実践開発コースの学校実習ルーブリック（一部）

修了生へのインタビュー

対談日 令和4年10月21日（金）午後

【修了生紹介】

天津 悠介 先生

- ・平成28年 山口大学教職大学院教育実践開発コース入学 第1期生 平成30年 修了
- ・実践研究題目「子どもが学習に意欲的に取り組み、学習力を高めていく授業づくり
ー子どもが本気になったときー」
- ・学校実習校 山口市立中央小学校
- ・現在 山口市立白石小学校教諭 4年生担任
- ー対談者ー



あまづ ゆうすけ
天津 悠介 先生



まえだ しょうへい
前田 昌平 教授



むらた そうや
村田 蒼也 院生

今回の学燈では、教職大学院の第1期生である修了生の天津先生と第7期生である現役院生の村田院生、そして二人の第一指導教員である前田教授との対談が実現しました。





村田院生

教職大学院に進学しようと思われたきっかけを教えてください。

福岡教育大学では、中学校体育の教員免許を取り、教育実習では中学校で体育を教える経験をしましたが、もう少し年齢の低い子どもたちに勉強を教えたいという思いから、小学校の教員になりたいと考えるようになりました。教職大学院で、学校実習を行いながら小学校の免許を取るつもりでしたが、大学での単位互換をすることができ、学部実習のみで免許を取ることができました。しかし、学部生の時には、小学校での教育実習ができなかったため、地元である山口大学教職大学院で、大学での学び（理論）と学校実習（実践）の往還を意識しながら、小学校教員になるための力をつけたいと思いました。大学院入学前から「子どもの主体的な学び」について研究したいという思いもあり、山口大学の教職大学院でなら十分な研究ができると思い志願しました。



天津先生



村田院生

教職大学院入学後の学校実習について教えてください。

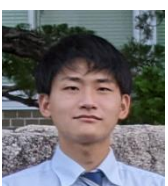
山口市徳地の中央小学校に学校実習に行かせていただきました。小規模校という利点を生かし、いろいろな学級（先生）の指導法を間近で見て学ぶことができたことや子どもと深く関わることもできたことが大きな経験になりました。1年間の学校行事の流れを知ることができたことも財産となりました。学部実習では、1時間の授業のために指導案を書いている意識でしたが、教職大学院の学校実習では、単元のつながりや育てたい児童像を思い浮かべながら、指導の連続性を考えることの重要性に気がつきました。児童に興味をもたせ続けるためにはどのようにしたら良いかを日々意識しながら、前田教授と授業をつくり上げていくことに力を注ぎました。

他の院生と協働しながら研究をしたことも思い出に残っています。地域の方と協力して「徳地和紙を使った提灯づくり」をしたことはとても良い経験になりました。

村田院生は学校実習を通してどのような学びがあると感じていますか。



天津先生



村田院生

長期間学校に関わることができるため、行事などの企画や運営、事前指導や事後指導などにも関わらせていただいて、授業だけでなく学校経営に関する学びも多いです。

では、教職大学院の学びが現場にどのように生きていると感じていますか。

大学卒業と同時に現場に出る自分を想像すると、きっと今のように自信をもって教壇に立つことができていると思いません。それだけ、教職大学院での2年間の学びは自信になっていると感じます。学校実習で T1 として授業をすることはもちろんのこと、T2 で授業に入り、ベテランの先生方の授業を見ながら、子どもへの声掛けや指示の出し方を学んでいきました。前田教授をはじめ、大学の先生方からも多くのご指導とご助言をいただき、深く教材研究をすることができたのも、教職大学院ならではの経験です。前田教授とは、1つの教材の指導法や1人の子どもの成長について何時間も研究室で語り合ったことを覚えています。今こうして教材を深く読み取り、子どもたちのために授業をつくることができるのも、教職大学院での学びが大きく役立っています。



天津先生



前田教授

現場に出て、やってみて良かったことや難しかったことは何ですか。また、現場で心がけていることはどのようなことでしょうか。

1年目で5年生の担任をしました。担任という仕事の責任の重さや仕事の多さに余裕がありませんでした。学級経営や授業づくりは教職大学院で学んだことを参考にし、なんとか1年目を終えることができました。苦労したことは、生徒指導です。不登校対応やほめ方・叱り方など、周りの先生方から聞きながら学んでいきました。そのクラスを持ち上げることはできませんでしたが、その子どもたちが卒業式後に私のところに来て、その子どもたちから「ありがとうございました。」と言われたとき、この子どもたちがきちんと育っていること、その過程に関わることができたことを本当にうれしく思いました。

心がけていることは、とにかくフットワークを軽くして動くことです。現在、情報主任を任されていますが、自分からICTの使い方について学んだり、学んだことを他の先生に紹介したりしています。教職大学院での学びに対する姿勢が現場でも生きています。



天津先生



村田院生 & 前田教授

ありがとうございました。

<インタビューを終えて>

3人のお話から、何年経っても変わることはない前田教授のゼミの温かさや熱心に勉強をされている教育実践開発コースの院生の熱意を感じることができました。紙面の関係ですべてのお話を載せることができないのは残念です。教職大学院の最大の魅力は「オン・ザ・ジョブ・トレーニング (OJT)」による、理論と実践の往還です。この言葉は対談の中で何度も出てきました。教職大学院での理論と学校現場での実践の往還は、教員としての資質・能力をより高いレベルのものへと引き上げることが分かりました。

アンケートのお願い

学燈を最後までご覧いただきありがとうございます。

学燈を見て頂いた方に、webアンケートを実施しております。

このアンケートの目的及び取得した情報の取り扱いは、以下の通りです。

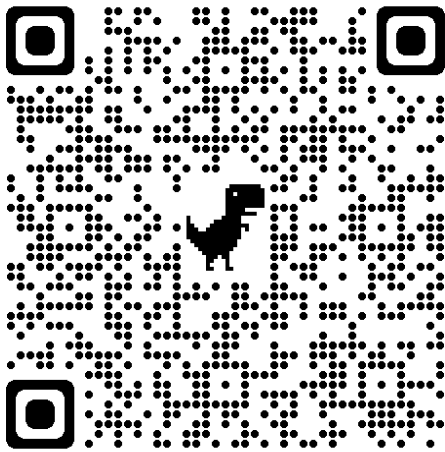
【目的】

- どのような方がどのような目的で学燈を見ているかという実態を把握すること。
- 今後の学燈について、内容の充実や読みやすさの改善を図ること。

【取得した情報の扱い】

- ご記入いただいた個人情報やご意見は、上記の目的のみに使用します。

アンケートにご協力いただける方は、以下のQRコードからアンケートへお答えいただけますようお願い申し上げます。



お持ちのスマートフォンからQRコードを読み取ってご回答いただけます。

下記URLからもご回答いただけます

リンク先のURL
<https://forms.gle/vUjQv9W8oUfMGmEG8>

ご協力ありがとうございました。次号以降の学燈もぜひご覧ください。